

# 承認欲求の充足を目的とした自己呈示に対する 受け手の感情の考察

○浅山優菜・押江隆  
(山口大学教育学部)

## 研究の目的

日常生活の中で、他人の行動に対し「この人は認めてほしいのだろう」「この人は自分のことを受け入れてほしいのだろう」等と感ずることがある。このように、他者に自分の存在を認めてもらいたい、あるいは自分の考え方を受け入れてもらいたいという欲求を承認欲求という(吉川, 1999) また、他者から見られる自己の印象に影響を与えようとする行動のことを自己呈示という(安藤, 1994)。承認欲求や自己呈示に関しては今日に至るまで様々な研究がされており、その受け取り方に関しても自己呈示の方法や場面によって受ける印象が異なることが報告されている(岡田・五味・山崎, 2020)。しかし、その受け取る印象の種別について、どのようなものがあるのか検討された研究は見受けられない。そこで本研究では、他者の承認欲求の充足を目的とした自己呈示がその受け手にどのような感情を抱かせるのか、またその要因について検討する。

## 方法

**調査協力者** X大学の学生 4名(男性 2名, 女性 2名)に面接調査を実施した。調査協力者の平均年齢は 19.75 歳, SD=1.30 であった。

**手続き** 2020年7月中旬から下旬にかけ、20分から30分の半構造化面接を Jitsi Meet(ウェブ会議サービス)にて実施した。協力者には研究の主旨を説明した上で、個人情報守秘を厳守すること、調査の協力によって協力者に不利益が生じることはないこと、いつでも中断・辞退できることを面接前に伝える等の配慮を行った。面接調査では、誰かの行動・発言に「この人は自分を見てほしいんだろうな」と思ったことはあるか、その時の状況、感情、その行動及び発言をしていた人との関係について、ソーシャルネットワークサービス(以下“SNS”と表記)上と対面状況に分けて尋ねた。

## 結果

面接調査の内容から逐語録を作成し、それを文脈のまとまりで分け、KJ法(川喜田, 1967)を参考に分析を行った。その中から内容が似ていると思

われたものはまとめてラベリングし、小グループを作成した。更に内容が見ていると思われたものをまとめ、中グループ、大グループまで構成した。関係のありそうなもの、因果があると考えられるものについても整理を行った。結果の図について、感情のカテゴリーがまとめられている部分を拡大したものを Figure1 に示す。

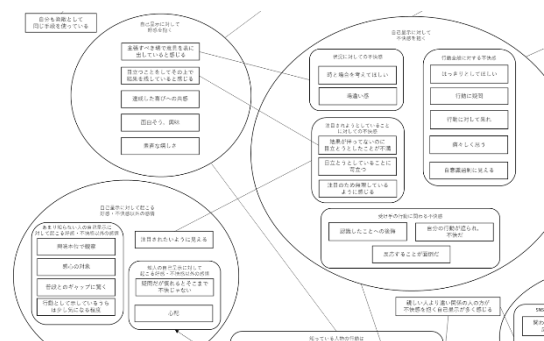


Figure1 他者の自己呈示に直面したときの感情のカテゴリー  
考察

承認欲求の充足を目的としているように受け取れる他者の自己呈示に直面したときの感情として、好感や不快感、どちらも取れないもの、また特に何も思わないといったもの等があることが示された。同一の受け取り方をした場合において、自己呈示の対象との関係が親密である場合や行動が状況に即していた、良い結果が得られたと評価した場合に起こる感情は好感を抱くものが多くなり、またその逆の場合は不快感を抱くものが増えると考えられる。また本調査では、対面状況より SNS 上において不快な自己呈示にかかわる声が多く得られた。これは対面状況より SNS 上の方が、遠い関係の人物と関わることが多い点、匿名性ゆえに目立とうとする行動が容易になる点に加え、調査期間が COVID-19 の感染症予防の観点から対面状況が減少し、その代わりに SNS 上で人と接する機会が増えていた点も一因として考えられる。

今回得られた結果をもとに、どの要因がどの受け取り方や感情と関係しているのかについて、場面想定法を用いてその状況に応じた感情を量的に検討することを今後の課題としたい。